

# ダンサーの一挙手一投足が観る者を深く震わせる。 「裸の身体」がかくも力強く語るものだろうか。

写真(大) 撮影/Ryoko Nagakubo  
写真(小) 撮影/La Frances Hui

Eiko & Koma, Cambodian Stories  
2006年4月7~9日 ロサンゼルス、Roy and Edna Disney / CalArts Theater



\*この作品の背景やメイキング映像などはwww.eikoandkoma.orgで見ることができる。

NYに拠点を置くアーティスト、エイコ&コマの新作をロスの劇場で見た。カンボジアを訪れた二人が、プノンペンの芸術学校で絵画を学ぶ10歳前後の学生たちとともに作り上げた作品だが、エイコ&コマはごく一部に顔を見せるに過ぎない。あくまでダンスとは全く無縁の、九人の少年と一人の少女が主役を務めるのである。とはいえ彼女らの身体は驚くほど生で、瑞々しく、また強い芯を感じさせるものだった。その不思議な強度は、身体が、ただ身体であるだけでこんなにも「語る」ことができるのかと動揺してしまうほどののだ。

全てに先立ってまず、一人一人が簡単な英語で自己紹介をする場面がある。名前と年齢、家族構成、将来の夢。ほとんどの場合、両親のいずれか、あるいは両方を既に亡くしており、数人の兄弟姉妹がいる。そして誰もが「有名な画家になりたい」と口にする(伝統工芸に近いものようだ)。黄色い砂が敷かれた舞台の左右には、素朴な線と色彩で女性を描いた大きな絵が吊られており、また少年たちが木の樽を使ってさらに巨大な女性像をみるみる描き上げていくスペクタクルもある。確かに、起源として

の女性=「母」のイメージが、少女とエイコとの重ね合わせによって強調され、近代的な家族集団を核とする再生産構造のイデオロギーを感傷的に反復してしまうナイーブさは気にかかる。しかしそうした弱点を隠そうともしないほど、舞台は率直で、嘘がない。現地のもと思しき歌謡曲が時折り聞こえてくるが、ドラマティックな演出は排され、デヴィッド・フェリの照明が舞台を終始一様に照らし続ける。出来事を隅々まで曝け出しつつ、一切を温かく包み込むその光は、エイコ&コマ特有の

ゆっくりとしたシンプルな身振りや淡々とした歩行と、その一挙手一投足をじっと噛み締める彼女彼女の体のざわめきを、余すところなく客席まで届けてくれる。

美しさは、おそらく誰の心にも強く響く。しかし決してそれだけではない、というか、強烈な美しさの印象を織り成す微視的ドラマを見ずしてただ「美しい」と言い放つてしまえば、その美すら実質を失うだろう。なぜならそこには、舞台に立つ者たちの「弱さ」への知覚が欠落してしまうからだ。

彼女彼女らは何よりも「言葉をもたない者」として観客の前に立つのである。クメール語を解さないアメリカの観客の前に、という意味ではもちろんない。絵画に携わる身体が、絵画を離れ、身体そのもので話そうとする時、それは自ずと言葉ならざる言葉、いわばコミュニケーションの可能性への「賭け」である他はないという意味だ。微かに重心を下げ、細く長い両腕を斜め前と後に伸ばし、緩慢に舞台を横切って行く、あるいは捻った上体で描く植物的な曲線を右へ左へとリズムカルに反復するなどといった身振りが、何度も繰り返されながら、いつも微妙な躊躇の揺らぎを孕んでいる。自分の技術に安心し切った怠惰な「ダンサー」とは違う、動きを一つ

一つ確かめるような感覚の繊細さが、目では捉え切れないほどの細かな震動となつて、テクスチャーを生んでいる。「不能」の震えではない。身体が自らを投じた「賭け」の強度なのだ。

表現者の身体から絵画の技術が引き算されて、裸になる。彼ら彼女らの手元から言葉=媒介が取り除かれることは、観客の手元からもそれが失われることでもあるだろう。両者の間の、媒介を欠いたこの関係をこそエイコ&コマは狙ったのに違いない。そして丸腰の身体は、なおも何かを伝えてくる。静かな、危うい綱渡りのような体の運びが、見ているこちらの体をただ震わせる。これは何なのだろうか?この壊れやすい言葉はいったい何を語るのか。ポル・ポト政権下の血腥い内戦と虐殺で傷ついたカンボジアという物語か、あるいはそこで生活する16歳のチャクレヤヤ、21歳のヴァンナク、「母」をめぐる(複数の)物語か? そうではない、むしろこんな紋切型の表象=代理の暴力的介入を何としても免れるために、言葉は捨てられ、発話は「賭け」に投じられたのである。そうして彼女彼女らは、物語の代わりに、語り得ない物語があると「う事実だけを、語るのではないだろうか。遠い国の人々の現実が、ある具体的な距離を隔てて厳然とあるという事実だけが、意味を突き越して、見る者の体をただ震動させるのではないだろうか。

おそらくダンスとは、いつもこうして、向かい合う身体と身体の距離に根差しつつ、近さによって遠さを、他者が他者であることを意識させるものなのだ。ただしそれは同時に、埋まらない距離そのものを共有することは可能だ、ということを示している。「カンボジア物語」は、カンボジアの現実の表象=代理を拒み、そうすることで、距離のリアリティを触知可能なものにするのである。そこで作動するのは、ダンスする身体だけがもち得る倫理と批評の力に他ならない。 武藤大祐(美学/ダンス批評)



## アリスフェスティバル2006開幕!

The 10th Asia Little Theatre Exchange Network in Tokyo

釜山⇒台北⇒バクダッド⇒熊本⇒西宮⇒大阪⇒名古屋⇒東京⇒埼玉⇒札幌

◆参加劇団19劇団10都市からと最多の規模を誇る Alice Festival 2006 が、いよいよ8月から開幕する。海外からは、釜山演劇製作所ドンニョックが東京の榴華殿(RUKADEN)と1ヶ月にわたるワークショップのうえ、共同制作作品を上演! 台北のRiverbed Theatreは、大阪の劇団態変と連続上演を展開し、今なお戦禍の続くバクダッドからはアルカサープとそのグループが新作を引っさげ登場する。タイニシアリスでしか観られないプログラムに乞うご期待! (8月のラインナップはp3を参照)

## INTOWN

場所と物語

●6月某日、阿佐ヶ谷にある名曲喫茶ヴィオロンにてスパンドレル レンジ「中央線」を観る。ヴィオロンはコンサートや、ごく稀に演劇公演も行われる小さなクラシック喫茶だが、この公演はその場所性を最大限に生かした物語と演出が光る小作品だった。2人1役の芝居の稽古に悪戦苦闘する2人の男の前に自称「魔女」という謎の女が現れる。2人は何とかして息を合わせようとするが、その溝は埋まらない。「真ん中を分ける線だから中央線…」などの少し詩的なテキストをそこかしこに散りばめながら、3人にまつわる幾つかの物語が交差し、浮かび上がっていく。全体として、どこかここではない全く違う空間で語られている物語のような、とても不思議な印象を受けた。全く違う空間といっても、ただのファンタジーのような大仰なものではなく、身近なものが一瞬にしてとても遠くに見えるような、不思議な遠近感なのだ。これには、ごく自然に幾つかの時間、空間の物語を語る戯曲の巧みさもあるのだろう。またヴィオロンという場所の力も大きいに違いない。

現実にある場所を舞台に行われる芝居は何度も観ているが、この作品でも現実の世界と物語の世界が交差する一瞬が何度もあった。小品ながらも、アイデアだけが先行するのではなく、丁寧に作り込まれた物語の力が味わえる好作品だった。(小笠原幸介)



スパンドレル/レンジ「中央線」 撮影/塩坪三明

# 演劇を上演していくことへの強い意志が、魅惑的な物語に、また新しい解釈を生みだした。

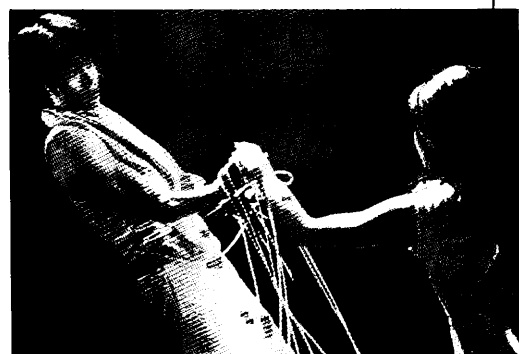
ルームルーデンス「身毒丸」  
岸田理生連続上演 2006 / 東京公演  
6月30日～7月2日 シアタートラム

「身毒丸」は「しんとくまる」と読む。継母と継子が、愛のために「弱法師」とはじまり、説経節、人形浄瑠璃・歌舞伎、折口信夫「身毒丸」(1917年)、三島由紀夫「弱法師」(1960年)を経て、寺山修司+岸田理生台本「身毒丸」は、演劇実験室天井桟敷の作品として1978年に初演された。その後1995年から2002年まで、蛭川幸雄氏演出作品として幅広く上演された。その模様は、中野玲子著「身毒丸」(1995年 学研)岸田理生「身毒丸」(1997年 劇書房)によって、追体験することができる。このように長い歴史を持つ物語は、当然個々に様々な解釈が施されている。そのいずれにも共通する概念は、「禁断の愛」である。この「普遍的」とも呼べる主題は、言葉を反せば「解決不可能」な問題とも言える。だから今回のルームルーデンスの公演は、寺山/岸田に対する現代的アプローチに留まらず、これまでの、そしてこれからの演劇が背負う主題と対決したと解釈できる。この公演を、舞台と脚本という二つの局面から考察する。

客入れの段階から、ソフォクレス「オイディプス王」とラシース「フェードル」が、妻と夫、母と継子という4人によって演じている。この両物語によって「身毒丸」の主題が「愛」であることを予感させる。本編中でも、この物語は挿入された。

それによって流れが分かりにくくなる場合があったとしても、果敢な挑戦という面で面白さが際立った。オープニングでは、岸田の映像をプロジェクターによって投影し、昨年ルームルーデンスが上演した「眠る男」のエンディング・シーン—光玉を持ち、後頭部に仮面をつけた男女複数人が舞う—を組み込み、岸田に対するオマージュを捧げている。天井にはゴミ袋が14個吊り下げられ、ゴミで作った家の主人が登場して本編が始まる。このゴミ袋は、ラスト・シーンで愛が成立し、セリが下がる事によって空になった舞台の上に総て落ちてくる。実際のオーケストラが舞台奥に位置を占め、オリジナル曲を生演奏で聞かせる点において、1978年天井桟敷の「A・シーザー」に対する答えを出している。この生演奏は、PAを通す場合とそのままの場合があり、そのボリューム調整によって、たとえ役者の台詞が聴こえ難くなくても、独自の音空間を演出する事に成功している。継母を演じる今野真智子氏は声を発する事が出来ないため、幾人の役者が声を合わせる。卒塔婆がりモコンで走り回る場面は奇抜で、大きな布を4人で翻す場面はいつのもルームルーデンスらしく迫力があった。しかしながら、物語性を強調するあまり、「体」の動きが欠けた。もっと「体」に語らせる場面が、これからのルームルーデンスには欲しい。

田辺氏はいつもの通り、特にエンディングの脚本を書き換えている。寺山版と中野版は禁断の愛が成立した後、継母が継子を食べる。岸田



ルームルーデンス

版(1997年)では、二人は顔と名前を失くして「出てゆく」。田辺氏も固定されている「ここ」から自由な「あそこ」へ移動する物語として解釈するが、ラストに父を受け入れる「家族」の場面を挿入している。これを現代的な、禁断だけではなく「愛」の形=「救い」という喜劇とするか、「家族」というカテゴリから脱出することができなかった悲劇と認識するかによって、公演総ての意義が代わってしまう。これは、見る者に委ねられていると言ってしまうだろう。

岸田理生連続上演は今年で幕を閉じるが、今回を越える公演を今後に期待することが、ルームルーデンスの意志でもあろう。「解決不可能」な問題に常に挑戦できないのであれば、演劇を行なう意味は失われる。ここに、演劇を行なう普遍的な主題が隠されているのであろう。(宮田徹也)

## 「批評」と「作品」をもう一度見直すために。

die pratzteで現在開催中の「ダンスが見たい!8」。その「批評家推薦シリーズ」の推薦人の一人である西田留美可氏より、ダンス批評について以下の文章を頂いた。批評家の姿勢についてのみならず、作品を巡る今の日本の環境全体についての提言となっているので、是非お読み頂きたい。

### <評価を評価する時代>

様々な業界で、その「評価」が妥当であったか、評価した側を評価する。評価そのものを見直す必要性が語られるようになってきた。評価する側に対する、これまでの無条件の信頼に対する不信感もあるし、本質的には一方通行でないとされる関係でも、実質的には一方通行になりがちな関係、環境ができてしまっていることに対する反省もある。

教師自身の人格が壊れていても、セクハラや殺人など不祥事が起きないと気づかれない、耐震偽装事件が起きて、やっと建築設計の監査機関の手抜きが発覚する。その評価の際に隠れていた虚偽や不正などが暴かれた結果、現実的な対策を講じる目的でそうした見直しが始まっている。だがそこまで害がない領域でも、評価の一方通行を検証する時代になってきたようだ。少子化で大学経営が厳しくなってきたこと、海外の大学に比較し、日本の大学のレベルの低下が叫ばれてきたことを受けて、やっと大学側は教師を学生が採点する仕組みを始めた。

翻って舞台芸術と批評の関係を見てみると、まだその関係はあるべき姿に育ってないことも手伝って、一方通行の関係はまだ存在している。さらにその一方通行の状況を敢えて利用し、公演を成功させるために役立つ、という状況すらある。たとえばダンス公演の場合、興行として成立しにくい環境であることも手伝って、批評が実質的には宣伝のために機能するようになっている。どこかに書かれた批評文が公演ちらしに掲載されたりするのがその良い例である。昔は振付家が、良い批評を書いてもらうため、公演プログラムの

中に金一封を忍ばせていることもあったらしいが、さすがに現在そうしたことはないにせよ、このように形を変え似たような連携関係は存在している。だが不祥事が起きることはいないし、何か不利益が生ずるにしても白目の下にさらされることはないから、問題にもなりにくい。しかしだからといって、評価する側が評価されることを免れている訳ではない。

以前より、批評家の批評も批評されるべき、とその検証の必要性が語られることは多くなったが、実際にそれはあまりなされていとは言えないだろう。観客は、くるようになった芸術家と批評家の餌食なのだろうか? 実際日本のように、批評精神自体が弱い国では、批評が存在しにくいのは確かだし、批評が批評的に読まれにくい。批評する側は客観的な立場を貫こうとするし、なるべく広範な知識を前提としたところからものを言おうとするから(成功しているかどうかは別として)、個人的な感想を持つ一般の観客に対して、一方通行が生じやすい。批評家が批判した作品だから本当かどうか見てみよう、とその意見を検証しようとする観客よりは、批評家が批判していたから見るのは辞めておこう、とその意見を受け入れる人の方が多いに違いない(どの批評家の意見か、ということは選べにせよ)。批評家が肯定的な場合も同様なので、その誉め言葉は宣伝するのに重宝がられる、という訳だ。さてこういう環境であることを考えてみると、批評家が集まって振付家やダンサーを推薦する、というこのディ・ブラッツの企画には問題があるのではないかと疑問を抱く人も出てくるだろう。ちらしに推薦文はあるし、その表現の違いはどうか、公演を盛り上げる形になっているのではないか、と。観客が劇場へ足を運ぶよう、批評家と芸術家が、批評家と劇場が結託し、つるんでるのではないかと、という批判もあるだろう。

しかしむしろ重要なのは、批評家の仕事を検証することだと思ふ。ある韓国の風刺漫画家が、日本は漫画がさかんなのに風刺漫画は弱いと語っていた(朝日新聞)。このようなことは他でも見受けられる。フランス

では若者がデモを積極的に行うことで国の新しい立法施策を停止させたが、日本であれば若者がデモを起こして国を動かすということはいかに、気楽に批評を批評する、批評そのものを楽しむ場が、批評を身近にし、最も批評家の仕事を検証する近道なのではないかと思っている。それによって、観客はより自分の目を信頼できるようになるし、批評家の批評に客観的に接することができる。今回のような批評家推薦シリーズというものは、批評家の仕事を楽しむ格好の場であろう。どの批評家が誰を推薦したか、公演を見てからもう一度推薦文と見比べられるし、それにより批評家の仕事も評価できるからだ(本当は推薦文より批評文の方がいいのだが)。

批評を批評する目的は、その批評の真否を問うことではなく、また優劣をつけることでもなく、批評を豊かにすることにある。様々な視点、様々な意見が自由に交わされる場は一つでも多くあるべきだし、相互に意見を交換できる空気も必要だ。特にかつてより一層批評が生きにくい時代になってきた今の日本では、

(西田留美可/舞踊評論家)



die pratzte「ダンスが見たい!8」の今後のスケジュールはp4参照。写真はダンサーの大岩淑子氏(西田留美可氏推薦)。

# 乱歩の世界をユニークな切り口から体験。 親子で楽しめる夏のワークショップが開催。

芸術文化を支援、発信するNPO  
アートネットワーク・ジャパンより  
MONTHLY LETTER Vol.32

ワークショップやシンポジウムなどの活動を通じて子どもとアーティストが出会う場を提供しているNPO法人芸術家と子どもたちが主催するワークショップ「らんぼと探偵」が8月に開催される。

親子、または家族で子どもと一緒に参加できるこのワークショップは6日間、ユニークなテーマに合わせて江戸川乱歩の世界を体験することができる。ただ絵を描いたり、ものを作ったりするだけの美術ワークショップだけではなく、一風変わった内容になっている。8月には夏休みの特別イベントである「ACTION!」などの楽しい企画も盛りだくさん。この機会に是非ご参加ください。

## ●親子のための「らんぼと探偵」ワークショップ

「少年探偵団」シリーズなど子ども向けの探偵小説を数多く残した作家「江戸川乱歩」。この乱歩の作品からイメージした「指紋」「暗号」「足跡」などのテーマに沿って、ワークショップ「らんぼと探偵」を行います。探偵とそのアイボウのギロン(犬)のナビゲートによって、小さい子どもでもらんぼの世界に親しみ、楽しめるようなワークショップです。

いつか子どもたちが大きくなって、乱歩の本を手にしたとき「あの「らんぼ」は、乱歩のことだったのか」とあらためて思い出すような、そんなワークショップにしたいと思って

います。

【日時】…2006年8月21日(水)5日(土)9日(水)19日(土)23日(水)26日(土) 11:00~12:00

【場所】…親子のためのプレースペース ギロンと探偵のいる2年1組(にしずかも創造舎)

【対象】…3歳~小学校2年生のお子さんのいる親子・家族

【参加費】…親子ペアで毎回400円(追加1人につき+200円)

【各回の内容】

8月2日(水)「指紋の巻」……………指をじっと見つめてください。なにか模様がありませんか? それか「しもん」です。「しもん」は、その人だけの模様です。ということは? ……

8月5日(土)「人相書の巻」……………いなくなった人を探すためのにお絵。それが人相書です。みんなで描いてみましょう。描きましたか? よおし探してみましょ。

8月9日(水)「レンズの巻」……………レンズを通してものを見ると、大きなものが小さく、小さなものが大きく見えてきます。いままで見えていたものってなんだったのかな。レンズを使って、世界再発見の旅に出ましょ。

8月19日(土)「暗号の巻」……………黒板になにか絵が書いてあります。でもよく見るとそこには隠されたメッセージが…。暗号だあ、これは暗号

ですね。読み解きますよ。

8月23日(水)「おぼけの巻」……………今日の教室には「不思議」がいくつかあります。みんなで探してみましょ。その「不思議」のなかに実は…。8月26日(土)「足跡の巻」……………足跡をたどって探してみましょ。途中で増えたり、減ったり。なんだか変な足跡です。見つかるものはなんでしょうか?

【お申し込み方法】…「らんぼワークショップ希望」と書いて、

(1)参加日

(2)参加する子どもと保護者の名前(ふりがな)

(3)子どもの性別 (4)子どもの誕生日

(5)ご住所 (6)お電話番号

(7)受付確認の返信方法(E-mail or FAX)と、そのご連絡先を、FAX か E-mail でお知らせください。約1週間以内、折り返し受付確認のご連絡をします

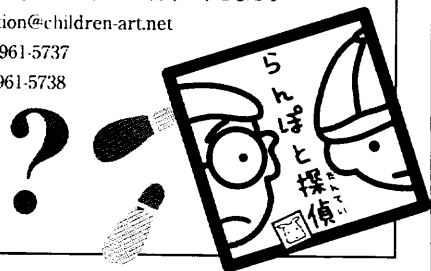
※お預かりした個人情報はこのワークショップの実施、ならびに「芸術家と子どもたち」からの、ご案内にのみ利用いたします。

【お申し込み先】…NPO法人芸術家と子どもたち

E-mail…action@children-art.net

FAX…03-5961-5737

TEL…03-5961-5738



# 映像と身体のコラボレーションに期待。 「ダンスがみたい! 8—批評家推薦シリーズ」より

## 新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

今津雅晴×今津武志 『In The Black Pool』 @麻布die pratze  
8/6(日)18:30 8/7(月)&8(火)19:30 ※7(月)アフタートーク有☆出演=今津雅晴 ☆映像=今津武志

die pratze dance festival「ダンスがみたい! 8—批評家推薦シリーズ10人の批評家が選ぶ10人のダンサー」より

→推薦人=稲田奈緒美(舞踊批評)……コンドルズの初期、少々力みのあるダンスの存在で目を引いた今津雅晴。木佐貫邦子、金森麗らの公演でみかけるたび、新たなスタイルへ自らの身体を開いていた彼は、その後も活躍の場を広げ、今年ルイズ・ルカバリエとのデュオで世界各地を回っている。そして今回、弟の武志が映像を担当し、兄弟コラボで新作を上演する。映像と身体がクロスする、モノクロ映画のような白と黒の世界で、過去が呼び出され、現在へ接続されるという。その場にどんなダンスが立ち上がるか、楽しみである。

★今津雅晴氏にインタビュー

Q 今回、ディ・プラッツの「ダンスが見たい!」という企画で、どういった事をテーマに持って来たいですか?

A まず、自分自身の中で今回のテーマと聞かれました。正直、まだ分かりません。まだ、決まっていない事が多々ありますし、しかし、それに対してという一貫性を持ったものには、なり得ないと思います。というのは、ダンスというのは、観客がいて初めて成り立つものだと思います。それを、「こうだ。」と決めたときに、受け取る観客の範囲を定める事になると思います。それと、自分自身でもその作品の範囲のようなものを決めたくありません。ただ、いえる事は、自分の中にある、近くでありながら、相対的なものが、キーワードになります。それは、影と光であり、月と太陽、生と死、男と女、静と動といった、反対であり続けながらも、繋がり続け、影響し合うもの。今回、一緒にやる今津武志との関係も、もしかしたら、そういったモノの一つなのかも知れません。そう、彼は今回映像として協力してくれます。しかし、実の弟であり一番影響しあっているのかも知れません。

Q しかし、そう言った相対的なものは果たして、背中合わせ



せにあるものなののでしょうか?

A 一時にはそれはお互いの領域に浸食したり、侵出していったりします。そうしたときに、初めてお互いがお互いの役目を、果たしたり、改めて感じる事が出来るのではないのでしょうか、題名の「In The Black Pool」はその内側に潜む、何かに向けた言葉でもあります。また、それは、劇場(観客を含めた)でもあります。

Q—では、なぜ、Poolなのでしょう?

A 自分は幼少期から、鏡子に住んでいました。醤油と周りは海しかない、港町です。よく、遅くまで海で遊んでいました。自分の中で落ち着く空間は、水の中と言ってもいいくらい、水が好きです。そして、実は、この題名を決めるときに、モンリオールの方で一緒に踊っている、ルイズ・ルカバリエに相談して、「Le Nageur」と「In The Black Pool」のどちらにするかという事で悩みました。ルイズにも何か水に関する何かがいんげんないかと言われました。結局、「Le Nageur」にした場合、自分自身の方が多く出て来よう感じが、弟のコラボでは無くなってしまふ気がしまい、空間性を意味する今の題名になりました。(まあ、フランス語で読みたいというのがあります)

Q—元ララ・ヒューマン・ステップスのルイズ・ルカバリエとは、いつから、コラボレーションをしていますか?

A 最初、去年在外研修で、モンリオールに行きました。そのときに彼女は受け入れ先になってくれました。そこで、生活しているうちに、一緒に作品を作ってみようという話になりました。それで、振付家のテッドも知っていましたし、話が決まりました。その後、「Cobalt Rouge」という作品が出来上がり、今では、世界20ヶ所を回りました。そしてこれからも、1

1月の東京を含め世界中を回る予定になっています。

Q—モンリオールと東京はどちらが、ダンスをしやすいですか?

A それは断然、モンリオールだと思います。まず、東京はまだお金の面で難しいと思います。ずいぶん昔よりは改善された面はありますが、まだまだ、人々の考え方が、ダンスに対して根付いていないと思う所があります。まあ、それには、劇場のチケット代の問題もあると思います。モンリオールでは、チケット代も安いですし、実験的な公演も沢山あります。それは企業の協賛も大きいし、政府からもしっかり文化としてのダンスを受け入れている体制があります。しかし、日本のダンスレベルにしてみたら、低い所にいません、むしろ、欧米・ヨーロッパと張り合うくらいに、作品レベル、そして、ダンサーのレベルもそれ以上と言える所があると思います。そのため海外で活躍している日本人ダンサーは海外でも、一目置かれています。それに、日本人の持っている質、そしてリズム、動き、間(ま)は、世界中のダンサー、誰もが持っているものではありません。

Q—ありがとうございます。最後に一言。

A—こちらこそ、ありがとうございます。とにかく、びっくり箱に飛び込むつもりで楽しみに来て下さい。

## JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratze  
7/21(金)~7/23(日)  
SLEEP [I see I]  
問=080-3093-8627 E-mail=  
sleep-ing@hotmail.co.jp HP=  
http://www.sleep-wakes-up.com

◆麻布ディ・プラッツ  
7/28(金)~7/30(日)  
ST企画「ダンスミュージカル  
UNFORGETTABLE」  
問=012-354-6485(ST企画)  
竹親家に代々伝わる伝説 五百年に一度、人知れず地球を訪れる月の住人。かくや郎は実在するの? 『竹取物語』を大胆にアレンジしたSFファンタジーダンスミュージカル。



# 社会的なテーマを真摯に問いかける注目の2作品が登場。～ALICE FESTIVAL2006公演より

今年もアリスフェスティバルの季節がやってきました。国内外から個性豊かな劇団が参加するフェスティバル開幕は、タイニイアリスではお馴染みの名古屋の社会派! 演劇人集団☆河童塾。

**演劇人集団☆河童塾**  
「かっぱ版・かぜの又三郎」  
8月12日(土)～13日(日)



8/12(土) …… 15:00&19:00  
8/13(日) …… 14:00

☆作・演出 = 加藤真人 ☆出演 = 坂本大作、長野武史、青木一、高橋幸誠、酒井尚子、加藤真人、その他 ☆問合せ先 = TEL&FAX 052-805-4623 E-mail: w3admin@kappajuku.com backcountry1991@yahoo.co.jp masato3236@jp-c.ne.jp (加藤携帯) Web = http://www.kappajuku.com → 今回のテーマは「痴呆症」。

認知症と診断された夫・慎介は、数年前、体調不良を理由に、会社を退職した…。妻・園子は、介護疲れで、謎の失踪…。土日は、大阪の出版会社に勤務する娘・祥子が、介護することに…。



然し、慎介は、妻の記憶と、介護を続ける娘・祥子の日常とが、擦れ違ってしまう…。対応に危機する祥子と、隣人たち…。

老いることの意味と、心のなかの迷路(宇宙)を描いて行く…。

そして、「リアルな演技、シリアスなエンタテインメント」を提唱している東京の劇団、机上風景が戦争についての物語を上演する。

**机上風景**  
「乾かせないもの」  
8月23日(水)～28日(月)



8月23日(水) …… 19:30  
8月24日(木) …… 14:30&19:30  
8月25日(金) …… 19:30  
8月26日(土) …… 14:30&19:30  
8月27日(日) …… 14:30&19:30  
8月28日(月) …… 19:30

☆作・演出 = 古川大輔 ☆出演 = 川口華那穂、浜恵美、池畑佳苗、村上出起、美穂丸、石黒陽子、加藤果実、おもちゃ、平山寛人、古川大輔 ☆問合せ先 = Tel&Fax: 03-5696-1770 E-mail = info@kijoufuukei.org Web = http://kijoufuukei.org/

→これは戦争についての物語です。

もちろん私は戦争を体験したことがありません。書くにあたっては、文献や写真などから想像していくしか手段はありませんでした。…これらの資料がどの程度真実を伝えているのかわかりませんが、

我々は表現者です。戦争を実際に体験することはできませんが、その苦しみを想像することはできます。実際に殺し合うことはできませんが、その狂気を想像

## アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場 TINY ALICE より最新ニュース

することはできます。戦禍をくぐり抜け、無事生還した兵士を抱きしめる家族にはなれませんが、その喜びを想像することはできます。様々な感情を想像し、役者が自分の感覚を通して舞台に立てば、観客に真実味を持って戦争を伝えられるはず…。それが我々の役割だと思っています。

「乾かせないもの」は兵士の帰還を待つ女性たちの話です。戦争の原因や規模や経過を語っているのではなく、彼女たちの感情をただ伝えていきます。

戦争体験のある方から観れば、批判したくなるころもあるかもしれませんが、ぜひご自分の経験した感情と俳優の想像力による感情とをくらべてみてほしいのです。

また私をふくむ戦争を知らない世代の方々にとって、自分の生きている世界以外に興味を持つ機会になればと思っています。

いつの日か、この物語を様々な国の言葉で広く伝えられればと願っています。



お得な共通券の情報や、全体のラインナップはタイニイアリスホームページでもご覧になれます。

…http://www.tinyalice.net

フェスティバルの開幕で益々目が離せない、タイニイアリスにご期待ください!

schedule for JULY 2006

### TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光蓮ビルB1 tel&fax 03-3354-7307  
http://www.tinyalice.net tokyo@tinyalice.ne.jp

7/21(金)～7/23(日) 劇団回印象 indian elephant  
【友盟】 問=090-1611-0880 ☆作/演出=鈴木厚人 ☆出演=加藤慎吾 片方良子 きたのあやこ 篠原有加 ◎6年間に交通事故で死んだ親友が、幽霊になって戻ってきたという、ありふれた話…?

7/29(土)～7/30(日) Unit-iF  
【S.A.S～遠い水平線～】 問=Unit-i@hotmail.co.jp ☆作=尾方美 ☆演出=小山一羊 ☆出演=免出知之 藤倉石美 佐藤高宏 澤田 たまただいすけ ◎UNIT-IF. 2005年7月にできた、「de zeppar(デズパ)」という演劇にスタイルを提唱している。

8/4(金)～8/9(水) 劇団ROCKETS  
【ハムレット】 問=soyaroquets@ezweb.ne.jp ☆作=W.シェクスピア ☆演出=五明紀之 ☆出演=服部桂吾 中野智(無名塾) 長谷部愛 増山浩一(劇団空演) その他 ◎テンマークの王子ハムレットは父王の急死の知らせを受けて帰国するが…運命の歯車が、今ゆっくりと動き出す。

8/12(土)&13(日) 演劇人集団☆河童塾  
【かっぱ版・かぜの又三郎】 Alice Festival 2006 参加作品問=052-805-4623 ☆作/演出=加藤真人 ☆出演=坂本大作 長野武史 青木一 高橋幸誠 酒井尚子 加藤真人 その他 ◎認知症をテーマに、老いることの意味と、心のなかの迷路(宇宙)を描いて行きます…。

8/18(金)～8/20(日) 劇団★ちゃんぽん  
【八月のジャハラザード】 問=090-9155-0020 ☆作=高橋いさを ☆演出=ささあすか ☆出演=政所嘉仁 大川陵 小林次 磯谷由美 竹原康仁 赤城由美子 矢野三加子 坂井虎哉 その他 ◎死んだのは、小劇場の役者と現金輸送車を襲った強盗犯人。二人は夜明けまで現世にとどまることを認められるが…。

### 麻布 die pratz

〒106-0044 港区東麻布1-26-6 2F T&F 03-5545-1385

die pratz dance festival ダンスがみたい! 8/7(土)～8/21

※今回「ダンスがみたい!」は、「インターナショナルシリーズ」～海外のダンサーと日本人による<共同制作><観作>シリーズと【批評家推薦シリーズ】～10人の批評家が選ぶ、10人のダンサー～の2つのプログラムに別れています。(チケット料金、予約、などは共通です。)

●料金…前売=¥2,500 当日=¥3,000(学生は500引、要学生証) ※ダンスがみたい!お得なチケット 通し券=¥16,000(学生=¥13,000) 5回券=¥9,000(学生=¥7,000)(インターナショナル、批評家推薦、両シリーズで使えます。1演目に付き1回有効、30枚限定、die pratzのみ発売、学生は要学生証)

●チケット予約…チケットぴあ 0570-02-9999 神楽坂 die pratz/03-3235-7990(火曜を除く12:30～17:30) kagurara2000@ybb.ne.jp

麻布 die pratz/03-5545-1385(月曜を除く18:00～23:00) azabubu26@ybb.ne.jp

※詳細 http://www.geocities.jp/azabubu/

■矢作聡子+庄隆志+野崎夏世  
【La trache】 ☆原案・構成・振付・演出=矢作聡子 ☆出演=庄崎隆志 野崎夏世 問=DanceHexagon@aol.com

8/1(火)19:30 8/2(水)15:30&19:30 ※1(火)アフタートーク有り 推薦人=吉田悠樹(舞踊学・舞踊批評)

■神雄二 DANCE MISSION  
【浄夜】 ☆出演=川野真子 神雄二 ☆音楽=シェーンベルク

【テール下の罫】 ☆出演=今日乃京子 善澄真記 大坪唯小川隆生 ☆構成・演出=神雄二 ☆音楽構成・作曲=神ゆかり

8/4(金)19:30 8/5(土)15:30 ※4(金)アフタートーク有り 問=03-3715-5841 推薦人=村岡秀弥(舞踊批評)

■今津雅晴×今津武志  
【In The Black Pool】 ☆出演=今津雅晴 ☆映像=今津武志

8/6(日)18:30 8/7(月)&8(火)19:30 ※7(月)アフタートーク有り 問=080-6573-0434 imapi@ezweb.ne.jp

推薦人=稲田宗務(舞踊批評)

以下一般公演(フェスティバルとは関係ありません) 7/28(金)～7/30(日) 劇団南極星

【Bank Bang(!)essen】 問=E-mail a\_fallem\_angel@ybb.ne.jp ☆作=高橋いさを ☆演出=宮内洋 ☆出演=南極星 ◎バーン!チューン!バーン!チューン!バーン!チューン!バーン!チューン!バーン!チューン! そんなのありかよ! こんな芝居です。さあ…

8/4(金)～8/6(日) 劇団石神井童貞少年團

【可憐なるばっさやろう狂詩曲】 問=090-5991-8228 ☆作・演出=森田金魚 ☆出演=西入美咲 松崎子 関井泰成 藤内正光 森田金魚 他 ◎運動音痴な郵便屋さんが届けたいのは、方向音痴な狂詩曲。「櫻レムコシ」と思うなら、「ばっさやろう」と叫んでください。

以下一般公演(フェスティバルとは関係ありません) 7/28(金)～7/30(日) 劇団ST企画

【ダンスミュージカル UNFORGETTABLE】 問=042-354-6485(ST企画) ☆作・演出=鮎月達矢 ☆出演=おおのゆうこ 花田麻由子 他 ◎かぐや姫のなぞ!!!

### 神楽坂 die pratz

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

ダンスがみたい! 8-批評家推薦シリーズ～10人の批評家が選ぶ、

原稿を募集しています

CUT INでは、演劇、ダンスなどの舞台芸術を中心に美術や音楽、映像などジャンルを問わず実験的な表現をとりあげた原稿を随時募集しています。詳細は kousukeogasawara@mail.goo.ne.jp (小笠原) までご一報ください。

schedule for JULY 2006